

研修会のお知らせ
39ページ参照

平成12年6月8日 第三種郵便物認可（毎月1日発行） 平成28年1月1日発行

2016.1
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみやく 富薬

1号

第38巻
No.318



ナンテン *Nandina domestica* Thunb. (メギ科 *Berberidaceae*)

生薬 ナンテンジツ（南天実）秋から冬に果実が熟した時採取し、後陽乾する。

成分 アルカロイド：domestine, berberine, isocorydine, jat eorrhizine, domesticine, isodomesticin, nandazurine, sinoacutine, higenamine、フェノール配糖体：nandinoside A, B 等。

効能 民間薬として百日咳や気管支喘息に用いる。

生薬 ナンテン

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



中国原産の常緑低木ですが、本草書に登場するのは意外に遅く、『図経本草』(1062)に「今はただ江東の州群にある。株は高さ三五尺、葉は苦楝に類して小さく、冬を凌いで凋みぬ。冬に紅子を生じて穂になる。人家で多く庭除の間に植ゑ、俗に南天燭といふ。時期に拘らず枝葉を採つて用ゐる」とあり、中国中南部で植えられていることや葉の形、常緑である事、冬に赤い実を付けること、人家の庭に植えられていることなど現在のナンテンと同一と考えられる内容が記載されています。北宋の沈括(1030-1094)の筆談に「南燭草木は、本草、及び傳記に記述されてあるが、一般には識るものが少である。北方では一般に多く誤って烏臼をこれとしてあるが、全く非である。今一般に所謂、南天燭がそのものだ。茎は蒴藿のやうで筋があり、高さ三四尺のものだが、廬山には一丈に盈つるものがある。南方地方に至って多い。葉は微に楝に似て小さい。秋になると実り、赤くして丹のやうだ」とあり、ナンテンの記載と判断されます。しかし、李時珍(1518-1593)は「南燭は…生では青く、九月に熟すると紫色になり、内に細子がある。その味は酸く、小児がそれをくふ」と言い、現在のナンテンとは違った植物を指しているようです。牧野富太郎氏は『植物名実図考』(1848)の図などを含めて、ここで言う南燭はツツジ科のシャシャンボ(*Vaccinium bracteatum*)であると言っています。後の『本草綱目拾遺』(1765)では修正され、南天竹の項に「南天竹とは楊根のことで、現に一般に庭除に植ゑ、冬に紅子を結び、それを愛玩するものだ、南燭でない。古方に用ゐた烏飯草と南燭とは山中に別の一種があるのだ。南天竹をそれに牽強し混淆してはならぬ」と南天竹と南燭は別種でナンテンと同一にしてはならないと記しています。また、『本草綱目』では枝、葉の効用だけが記載されていましたが、『本草綱目拾遺』には「子 紅杷子と名ける。八角蝨を治するに、水銀と共に搗爛らして擦れば除ける。また酒に浸すもよし。風痺をさる」と果実の効用が記されています。

日本では東海道以西、四国、九州に分布していますが、中国から渡来したという説が有力です。常緑で冬には真紅の果実を多数つける様子は非常に目立つにもかかわらず、藤原定家の日記『明月記』(1180-1235)が始めの記述であることから、平安時代末期に渡来したのではと推測されています。本草書には『和漢三歳図会』(1713)の前段では李時珍の南燭を取り入れています。後段には「其の子朱赤色で皮を剥げば内は白く大豆の肉の如く、一片となる。未だ紫色で内に細子有る者を見ず」とあり、果実が紫色でなく、赤色であることを明記しています。また、「山陽地に大木有り。作州、土州の山に長さ二丈余り、太周一尺二三寸の者有り」と年数の経った巨木があり、昔から栽培されていたのではと思われます。

ナンテンが「難を転ずる」とされ、縁起木、魔よけ、厄除けの木として正月の床に飾られたり、赤飯などの祝い事の食品に葉を添える風習が残っています。また、古典園芸植物としても愛され、『草木錦葉集』(1829)には42品種が記録されています。明治時代の『南燭品彙』には104品種が記載され、現在でも50品種前後が栽培されています。(村上守一 記)